

II-(7) 研究者のアクセス手法 II. 社会科学系図書館と研究者のニーズ

一橋大学附属図書館長

齋藤 修

はじめに

社会科学系といっても研究者のタイプは多様です。どのようなタイプの研究をしているユーザーかによって、図書館に期待するところは大きく異なるでしょう。各大学図書館が社会科学系の図書についてどのような品揃え——蔵書構築——をすべきかは、その大学の社会科学系教員の構成がどうなっているかによって大きく変わるはずです。

私も社会科学系の研究者ですが、私個人の考えを語る前に、社会科学諸分野の多様性を、図書館の側からみてわかりやすい尺度でもって分類してみたいと思います。

そのうえで、私の体験から社会科学系図書館に期待するところを述べ、右肩上りの時代が終わってしまった現在、また電子化の流れが加速する時代に、図書館はどのようなことをすれば、社会科学系の研究者/ユーザーの満足度がもっとも高くなるかを考える材料としていただけたらと思います。

1. 社会科学：その分類学

社会科学といっても内容は多彩で多様、現存する学部/研究科の数よりはるかに多くのタイプ分けができます。しかし、その多様さを次の三つの尺度で分類すると、図書館員にとってはわかりやすいのではないかと思います。

- 本重視—雑誌重視
利用するのが本か雑誌かだけではなく、業績としても本が重視されるか雑誌論文が重視されるかも異なる
例 歴史学 vs 経済学
- 学会/国際学術誌—大学紀要
流れは学会/国際学術誌へ
(出版社の発行するアカデミックな内容の雑誌の存在も無視できないが)
例 経済学 vs 法学
- 資料(データ)志向—文献志向
資料(史料)あるいはさまざまな形態をとったデータ(たとえば統計)を研究の中心にすえるか、ひたすら文献を読み、考えるのか
例 歴史学 vs 哲学/学説史

2. 良い図書館とは

次に、経済学系のなかでもっとも歴史学に近い研究者/ユーザーとしての、それも私個人が考えたところの図書館評価基準といったものについて述べます。

- 蔵書規模
- 本と雑誌
- 開架と閉架
- 閲覧と貸出し
- 一般書架と特殊資料
- 中央図書館（UL）とサブジェクト・ライブラリ

3. 図書館とアーカイヴ

図書館は雑誌と書籍を収集するところで、資料あるいはデータと呼ばれるものを収集するのはアーカイヴということになっています。しかし、独立の文書館、アーカイヴをもっている大学は多くなく、しかも図書館が収集すべきものとアーカイヴが収集すべきものの境界は明瞭ではありません。

他方で、大学設立史、関係者の個人文書類、地域関係資料を中心に、すでに少なからぬ非図書資料をもっている図書館は相当あるはずです。

これからは、「非図書資料」——その多くは私たち社会科学系の研究者にとっては「データ」です——も図書館で積極的に収集する対象と考え、積極的に使ってもらう方策を考えたほうがよいように思います。少なくとも、大学に籍をおく研究者/ユーザーの立場からすると、そのほうが便利です。

4. 社会科学における電子化のゆくえ

- e-ジャーナル

近年、経済学を中心にe-ジャーナルの存在感は確実に高まっており、他の社会科学分野でも、便利と思う人が増えています。しかし、自然科学とはどこか決定的に違うところがあります。その違いは、e-ジャーナルが最新の研究文献をみるための手段とは必ずしもみなされていないという点にあるのではないのでしょうか。古い論文でもいまだによく使われる論文があり、新しい論文といっても、自然科学とは新しさの物差が違うような気がします。

- 機関リポジトリ
この点でも社会科学の先生は乗り気でないといわれます。それは雑誌論文よりは著書のウェイトが高く、また雑誌論文を書く場合でも日本の雑誌への掲載が多い以上、当然のことかもしれません。しかし他方、機関リポジトリは、使いようによっては大学紀要復権のきっかけとなるかもしれません。
- 非図書資料のデジタル化/公開
社会科学、とくにデータ重視の分野の研究者にとって、電子化の恩恵が一番感じられるのは、使いたいと思っている資料がデジタル化され、ウェブ上に公開された場合ではないでしょうか。
- 全文検索データベース
そのことの延長ですが、大型コレクション等の全文検索データベースの登場も画期的なことです。

例 英国議会文書 (Blue Books, 1801-2005) データベース

18世紀英語・英国刊行物データベース

これらは、単に貴重資料へのアクセスを容易にするだけでなく、今後、研究の仕方を変える可能性すらあるように思います。逆にいえば、このようなデータベースを導入できた大学と揃えられない大学との、研究環境上の格差が開くことになるでしょう。

5. 期待するもの

今後、e-ジャーナルがあつて、図書館の、あるいは他機関のウェブサイトからデータをダウンロードできれば十分だという社会学者は確実に増えるでしょう。しかし、彼らが絶対多数をしめることはないのではないのでしょうか。社会科学の多くの分野では、相変わらず冊子体の書籍とネットからは得られないタイプのデータを必要とするはずで。結局、バランスが大事ということはいつになっても同じだと思います。

そのなかで、これからの社会科学系図書館は何をすべきか、私のような研究者/ユーザーからみた社会科学系図書館の努力目標を3つあげて、結びに代えたいと思います。

- 図書館のストックを活かす
増加率から、利用率を高める方向へ
使ってもらう工夫を
その一つの手段に、書誌情報、資料そのもののデジタル化と公開

- 図書館に来てもらう
ブラウジング
UL への集中と開架化
「個人研究費」の問題
- 専門性を高める
研究者にとって図書館は「教えてもらえるところ」
所在情報
データの氏素性